

沖縄歴史の 散歩道

vol.12

◆近代遺産を巡る③

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



當山久三の銅像（金武町）



改租記念碑（那霸市）

那覇市の奥武山公園内にある改租記念碑（1907年）は近代沖縄の土地整理事業（1899～1903年）に関する石碑で、琉球王国時代の土地共有制（地割制）から近代私有制・租税制度への移行を記念して建立されました。またその隣には台座のみ残されていますが、これらを推進した当時の沖縄県知事の奈良原繁の銅像がありました。奈良原は鹿児島県出身で「琉球王」との異名を持つた強権的な知事でしたが、戦時の金属回収により銅像は撤去され

たと考えられています。同じく戦前の銅像といえば「沖縄移民の父」と称された當山久三の像が金武町にあります。その功績が認められ、1931年に銅像が建立され、1935年にはその近くに記念館も建設されました。この銅像も戦時中の回収により一時撤去されましたたが、戦後の1961年には再び設置され現在の姿となっています。當山の銅像は再建されたにも関わらず、一方の奈良原の銅像は今日まで設置されていないのは対照的です。

當山久三像の近くには戦前の碑も残されています。「忠魂碑」（1936年建立）です。戦前の皇民化政策のなか、日露戦争や満州事変、日本戦争の戦死者を顕彰するために設置されたもので、沖縄各地に残存しています。中城グスクの二の郭城壁内にある忠魂碑（1915年）や首里城歓会門前の城壁付近にある残骸となつた忠魂碑などです。

興味深いことに、忠魂碑を戦後、「慰靈碑」として位置づけなおして、そのまま使用しているものも存在しています。読谷村渡慶次にある忠魂碑は、1913年に建てられましたが、戦後となつても地域住民は慰靈碑と

しての意識を持っていたため、改めてこの歴史的建造物を「慰靈碑」として再利用することが合意され、恒久平和が祈願されています。石碑に込められた意味が定義しなおされ、現代においても地域社会のなかで残り続けているわけです。



忠魂碑（読谷村）

上里 隆史 (うえざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ボーダーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。